宮崎市文化財調査報告書第38集

北中遺跡

宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

宮崎市教育委員会

序

近年、全国各地で開発に伴う発掘調査が行われており、それによってこれまで確認されていなかったものが次第に明らかになってきています。また、これらの考古学上の新しい発見が相次ぐなかで、国民の考古学に対する関心が非常に高まってきています。

本書は、宅地造成に伴い発掘調査を実施した北中遺跡の発掘調査報告書です。今回の調査では、中世のものと思われる鏡や土師器が出土したのをはじめ、竪穴住居、溝状遺構、土壙墓などの遺構も確認されています。

本書が広く活用されて、吉村町付近における古代から中世の歴史を解明するのに役立てていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただいた関係機関、地元の方々、作業員の皆様に心から感謝申し上げます。

平成11年３月

宮崎市教育委員会

教育長　内　藤　泰　夫

例　　言

1．本書は宅地造成工事に伴って、平成９年８月18日～平成９年11月８日に実施した北中遺跡発掘調査報告書である。

2．調査組織

調査主体	宮崎市教育委員会		
	文化振興課	課長	野間重孝
		係長	井手上仁悟（平成９年度）
		〃	永井淳生（平成10年度）
調査庶務		技師	鳥枝　誠（平成９年度）
		主事	竹野隆司（平成10年度）
調査員		技師	時任直也
整理補助		属託	椎　由美子
		〃	松永光雄
		〃	小川正子
		〃	久富なをみ

3．本書の執筆は時任が行った。

4．写真撮影は時任が行った。

5．本書の編集は時任、久富が行った。

6．掲載図面の実測、製図は時任、椎、松永、小川が行った。

7．遺構の略称は次のとおりとする。

ＳＡ・・・竪穴住居、ＳＢ・・・竪穴状遺構、ＳＣ・・・土坑、ＳＤ・・・土壙墓、ＳＥ・・・溝状遺構

8．出土遺物については宮崎市教育委員会で整理・保管している。

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．遺跡の立地と環境 …… 1
　2．調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ．調査の記録 …… 3
　1．調査の概要 …… 3
　2．遺構について …… 5
　3．遺物について …… 10
Ⅲ．まとめ …… 19

挿図目次

第1図　遺跡周辺図 …… 2
第2図　調査区図 …… 3
第3図　遺構配置図 …… 4
第4図　ＳＡ１遺構実測図 …… 8
第5図　ＳＤ１実測図 …… 9
第6図　ＳＤ２実測図 …… 9
第7図　ＳＤ３実測図 …… 9
第8図　ＳＡ１出土遺物実測図 …… 12
第9図　ＳＢ２出土遺物実測図 …… 12
第10図　ＳＥ１出土遺物実測図 (1) …… 13
第11図　ＳＥ１出土遺物実測図 (2) …… 14
第12図　ＳＥ２出土遺物実測図 (1) …… 14
第13図　ＳＥ２出土遺物実測図 (2) …… 15
第14図　ＳＥ４出土遺物実測図 (1) …… 15
第15図　ＳＥ４出土遺物実測図 (2) …… 16
第16図　ＳＥ５出土遺物実測図 (1) …… 16
第17図　ＳＥ５出土遺物実測図 (2) …… 17
第18図　ＳＥ６出土遺物実測図 …… 17
第19図　ＳＥ７出土遺物実測図 (1) …… 17

第20図　ＳＥ７出土遺物実測図　(2) …… 18
第21図　ＳＥ10出土遺物実測図 …… 18
第22図　ＳＥ11出土遺物実測図 …… 18
第23図　遺構外出土遺物実測図 …… 18

図版目次

図版１　北中遺跡全景図 …… 21
図版２　ＳＡ１出土状況（全景） …… 21
図版３　ＳＡ１出土状況 …… 21
図版４　ＳＡ１完掘状況 …… 21
図版５　ＳＢ２出土状況（全景） …… 22
図版６　ＳＢ２出土状況 …… 22
図版７　ＳＤ１出土状況 …… 22
図版８　ＳＤ１完掘状況 …… 22
図版９　ＳＤ２出土状況 …… 23
図版10　ＳＤ２完掘状況 …… 23
図版11　ＳＤ３完掘状況 …… 23
図版12　埋甕出土状況 …… 23
図版13　ＳＥ２出土状況 …… 24
図版14　ＳＥ２張り出し部 …… 24
図版15　ＳＥ２円形掘り込み …… 24
図版16　ＳＥ２円形掘り込み …… 24
図版17　出土遺物　(1) …… 25
図版18　出土遺物　(2) …… 26

Ⅰ．はじめに

1．遺跡の立地と環境（第１図）

北中遺跡は、宮崎駅東側に広がる標高約５ｍの微高地の東端部にあたる。本遺跡の東側一帯は約２ｍほど下がっていて水田地帯となっている。

北中遺跡の南西約700ｍのところに大町遺跡が存在する。この遺跡からは63軒の竪穴住居、周溝状遺構や掘立柱建物、近世墓等多数の遺構が検出された。遺物は甕、甑や鉢、高坏等多数の土師器や須恵器、紡錘車が出土した。また、周溝状遺構からは弥生土器の甕、壺、高坏がそれぞれ出土している。これらの出土遺物から弥生～現代までの複合遺跡であることが確認された。

北中遺跡の南西約1.4km のところに浄土江遺跡が存在する。この遺跡からは30軒余りの竪穴住居、数条の溝状遺構が検出された。このうち竪穴住居から埋甕炉及び竈が検出された。遺物は甑、甕、長胴甕、高坏等の生活用具がセットで出土した。これらの出土遺物から６～８世紀の集落跡であることが確認された。

北中遺跡の北約800ｍのところに檍遺跡が存在する。この遺跡からは弥生時代前期の積石墓９基、小児用甕棺墓３基が検出された。遺物は、甕棺に使用された土器や墓地への供献土器が中心で、甕棺は広口壺を使用している。供献土器は小型の甕・鉢・壺が出土している。

この他、北中遺跡周辺には柿本遺跡、今村遺跡、曽師遺跡、宮脇遺跡、上西中遺跡、中原遺跡、上無田堤遺跡、檍小学校遺跡、庵ノ山遺跡、引土遺跡といった散布地が所在している。また、周辺には檍１号墳も所在する。

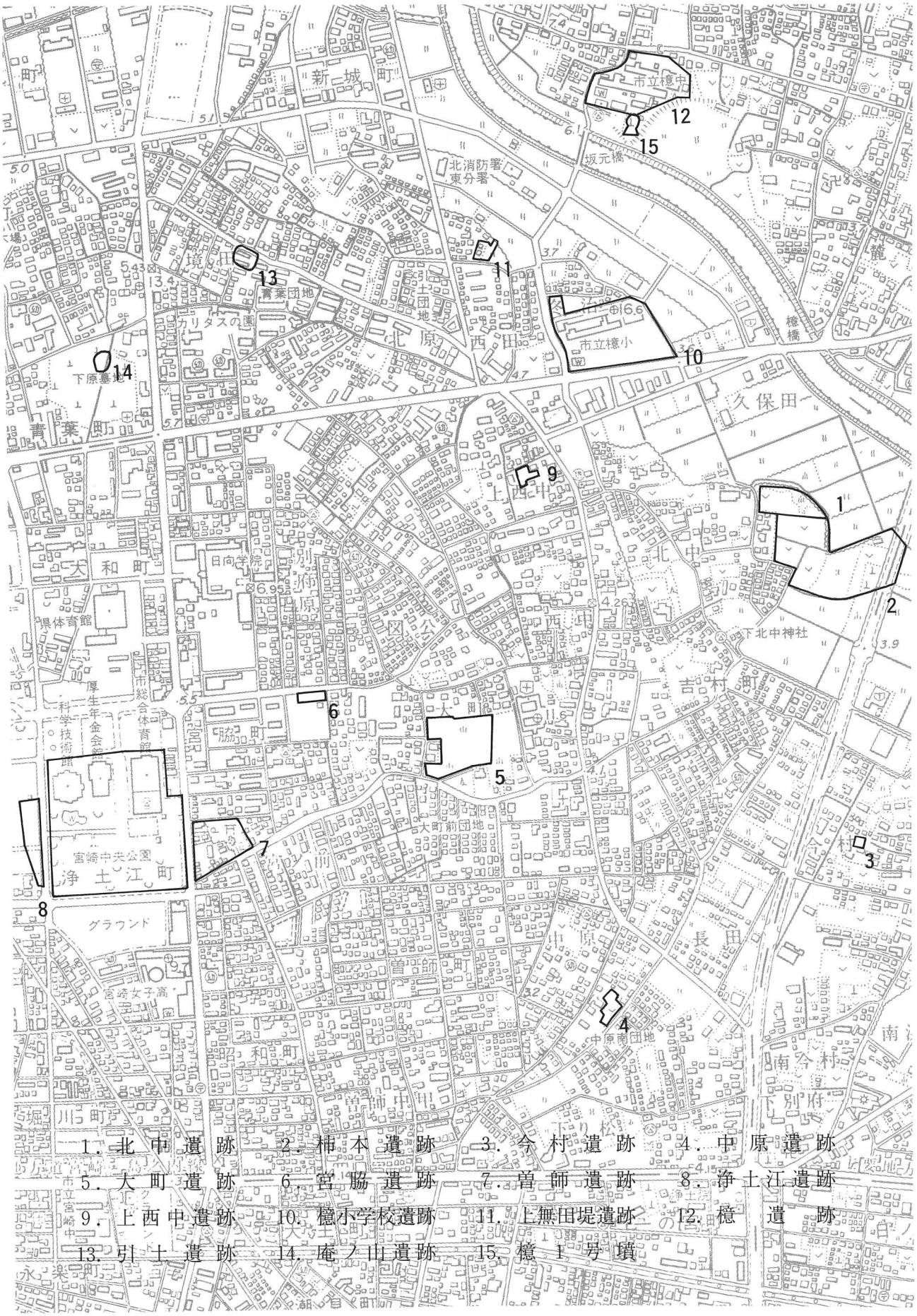
【参考文献】

『大町遺跡』宮崎市文化財調査報告書第33集　宮崎市教育委員会　1998
『浄土江遺跡』宮崎市文化財調査報告書第６集　宮崎市教育委員会　1981
『浄土江遺跡Ⅱ』宮崎市文化財調査報告書　宮崎市教育委員会　1993
「檍遺跡」『宮崎県史』資料編考古２　宮崎県　1993
『宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書』Ⅱ〔リゾート地区を中心として〕宮崎市教育委員会　1990

2．調査に至る経緯

平成８年７月22日付けで、有限会社[redacted]より埋蔵文化財の有無照会が提出された。それを受けて宮崎市は試掘調査が必要である旨、有限会社[redacted]に回答した。その後、平成８年８月21日に試掘調査を実施した結果、発掘調査が必要であることを確認し、有限会社[redacted]と土地所有者である[redacted]と協議を重ねて計画地西側約2,000㎡について発掘調査を実施するということで合意した。

それを受けて平成９年８月18日～平成９年11月８日の期間で発掘調査を実施した。



第1図　遺跡周辺図（1／10,000）

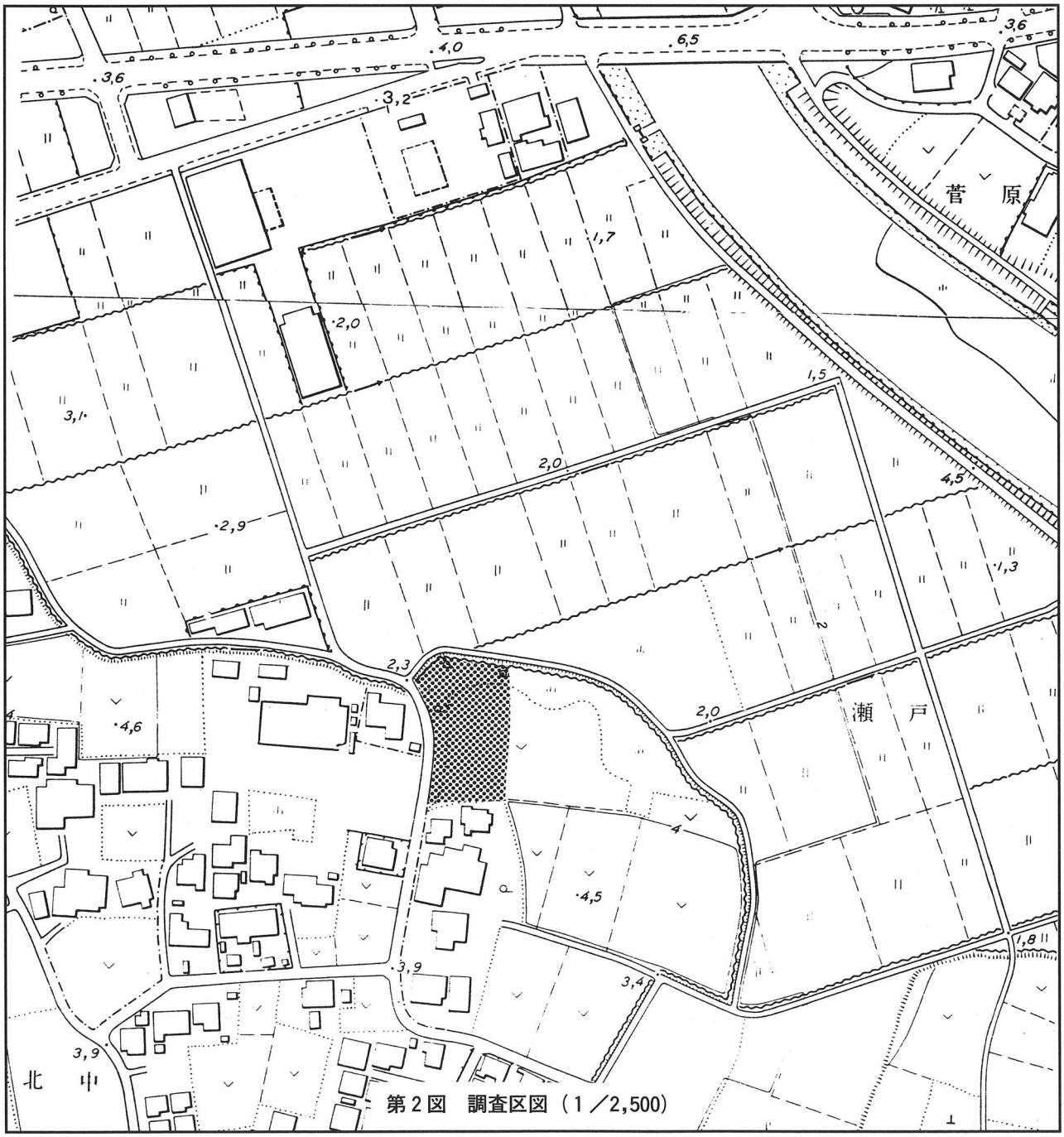
Ⅱ．調査の記録

1．調査の概要（第２、３図）

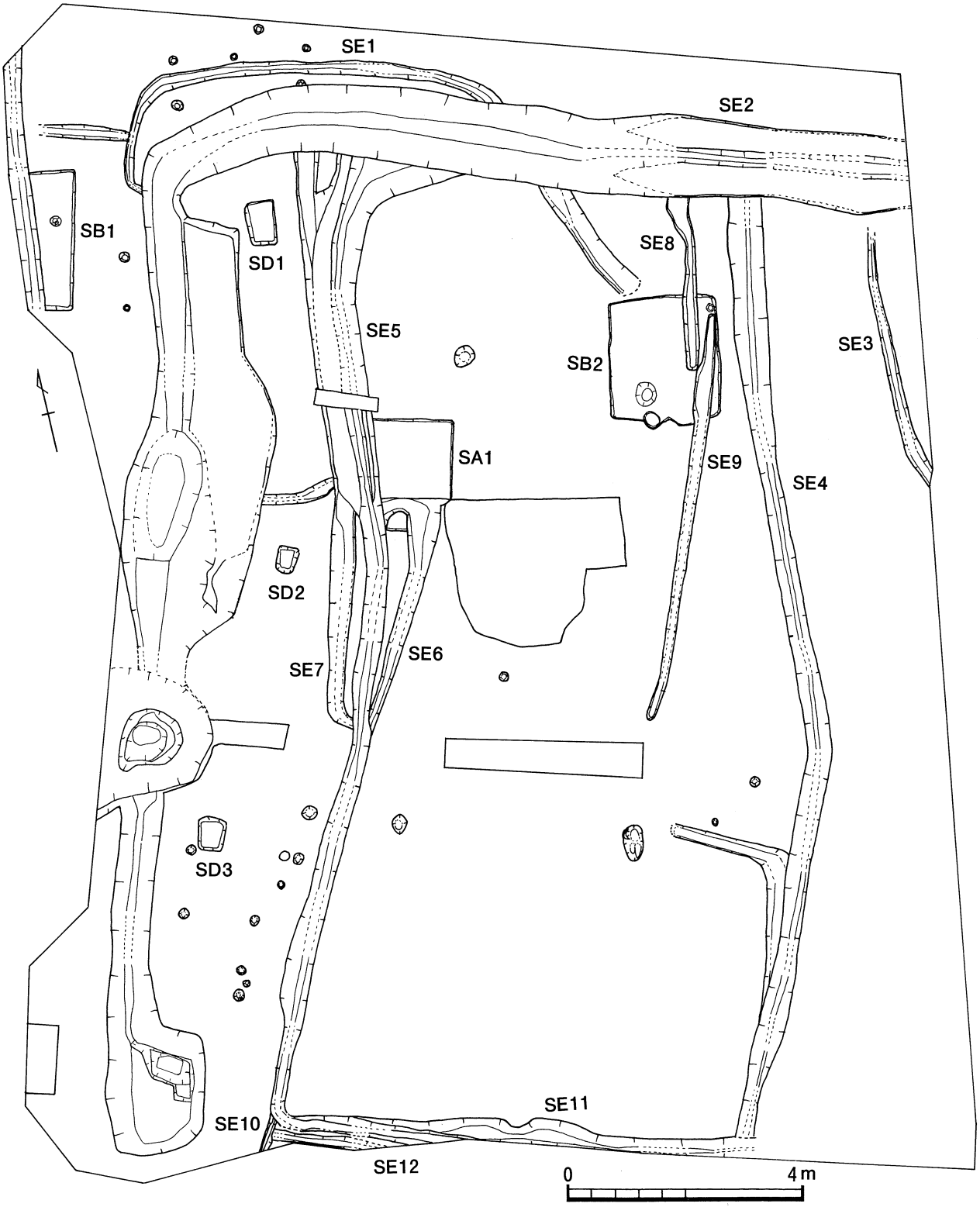
調査対象面積の2,000㎡について発掘調査を実施した。その結果、竪穴住居が１軒、竪穴状遺構が２基、土坑が２基、土壙墓３基、溝状遺構が12条検出されている。

このうち、溝状遺構のうちの１条に３ヵ所、円形の掘り込みが確認された。

遺物に関しては、竪穴住居から土師器の甕、高坏、磁器の碗、軽石が、竪穴状遺構から弥生土器の二重口縁壺、土師器の碗、壺、甕、高坏、器台、鉄滓が、溝状遺構から須恵器の甕、壺、陶器の壺、甕、五輪塔の空風輪、地輪がそれぞれ出土した。また、遺構外より鏡、須恵器の坏が出土した。



第２図　調査区図（１／2,500）


SE1
SE2
SB1
SD1
SE8
SE5
SB2
SE3
SA1
SE9
SE4
SD2
SE6
SE7
SD3
SE11
SE10
SE12
0
4m

第3図　遺構配置図

2．遺構について

ＳＡ１（第４図）

南北約4.1m、深さ７ cm を測る。西壁はＳＥ５、南壁の一部はＳＥ６に切られており、はっきりしない。床面は南に向かって、緩く傾斜している。柱穴は確認できなかった。

遺物は土師器の甕、鉢、高坏が出土している。

ＳＢ１

南北約６m、深さ40cm を測る。西側半分は調査区外にかかる。床面から柱穴は確認できなかった。

遺物はほとんど出土しなかった。

ＳＢ２

南北にやや長い長方形プランで、南北約5.5m、東西約4.8m、深さ20cm を測る。北壁及び南壁の一部はＳＥ８、９に切られており、はっきりしない。遺構内より、ピットが１基検出されたが、主柱穴となりうるものではない。

遺物は土師器の甕、碗及び鉄滓が出土している。また、流れ込みと思われる弥生土器の二重口縁壺、高坏も出土している。

ＳＣ１

長径１m、短径0.8m、深さ40cm を測る。ＳＡ１と切りあっている。遺物はほとんど出土しなかった。

ＳＣ２

長径0.9m、短径0.8m、深さ40cm を測る。遺物はほとんど出土しなかった。

ＳＤ１（第５図）

南北約2.1m、東西約1.2m、深さ約38cm を測る。床が南東のほうに傾斜し、南東端が最も深くなっている。人骨が出土している。

ＳＤ２（第６図）

南北約1.3m、東西約0.9m、深さ約44cm を測る。南東側が細くすぼまる形となっている。人骨が出土している。

ＳＤ３（第７図）

南北約1.4m、東西約1.2m、深さ28cm を測る。

ＳＥ１

幅0.5m、深さ約20cm を測る。ＳＥ２の北側に位置し、調査区北西部分でＬ字状に曲がり、溝の南側と東側でＳＥ２によって切られている。

遺物は陶器の碗、皿、鉢、磁器の碗、皿、坏、土師器の高坏、用途不明の軽石製品が出土している。

ＳＥ２

幅2.7m、深さ1.5mを測る。調査区西及び北側に位置し、調査区北西側でＬ字状に曲がる。調査区東側で溝に１段テラスをもつ。また、北西部分に張り出し部が、西側中央部に３ヵ所円形の掘り込みがそれぞれ確認された。

遺物は土師器の甕、高坏、鉢、須恵器の長頸壺、器台、壺、布痕土器、陶器の碗、甕、壺、鉢、磁器の皿、用途不明の軽石製品が出土している。

ＳＥ３

幅0.5m、深さ約20cm を測る。調査区東端に位置する。

遺物は土師器が出土したが、小片がほとんどである。

ＳＥ４

幅0.8m、深さ約40cm を測る。ＳＥ３の西側に位置し、途中、調査区中央部のやや南側で「く」の字に曲がっている。

遺物は砥石、磨石、五輪塔の空風輪、地輪が出土している。

ＳＥ５

幅２m、深さ約40cm を測る。ＳＥ２の南側に位置する。溝の北側は１段テラスをもち、調査区中央部から急に狭くなる。

遺物は須恵器の碗、壺、陶器の甕、壺、鉢、擂鉢、用途不明の軽石製品が出土している。

ＳＥ６

幅0.6m、深さ約30cm を測る。溝の北側で直角に曲がってＳＡ１を切っている。北側と南側でＳＥ５によって切られている。

遺物は陶器の擂鉢が出土している。

ＳＥ７

幅0.9m、深さ約30cm を測る。溝の北側と南側でＳＥ５によって切られている。

遺物は陶器の碗、甕、磁器の皿、土錘、両端穿孔土錘、砥石が出土している。

ＳＥ８

幅0.6m、深さ約20cm を測る。溝の北側はＳＥ２によって切られ、南側はＳＢ２を切っている。

遺物はほとんど出土していない。

ＳＥ９

幅0.7m、深さ約20cm を測る。溝の北側はＳＢ２を切っている。

遺物はほとんど出土していない。

ＳＥ10

幅0.3m、深さ約20cm を測る。溝の北側はＳＥ５によって切られている。

遺物は陶器の皿、土師器の高坏、砥石が出土している。

ＳＥ11

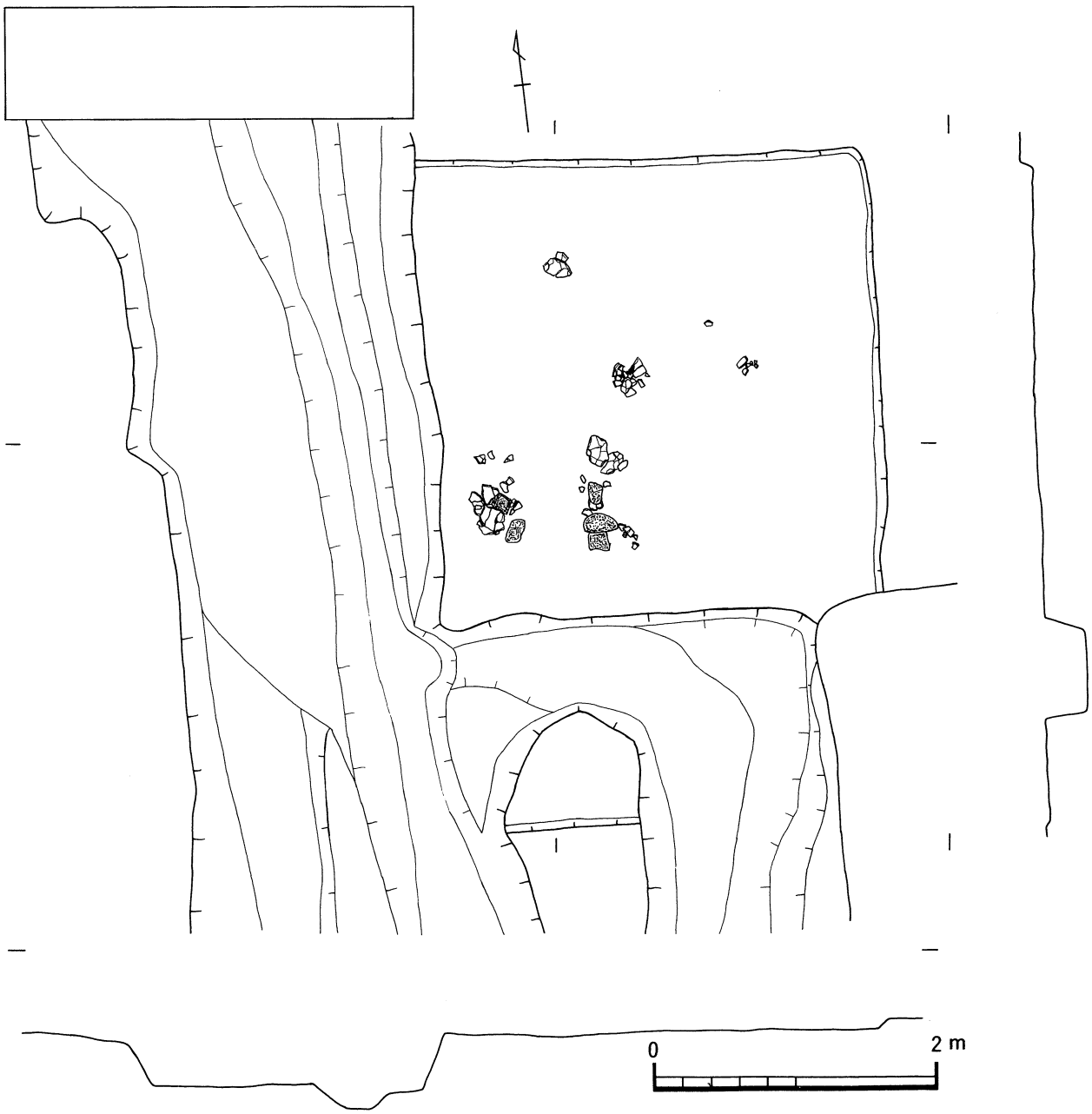
幅0.4m、深さ約20cm を測る。調査区南端に位置する。

遺物は土師器の甕が出土している。

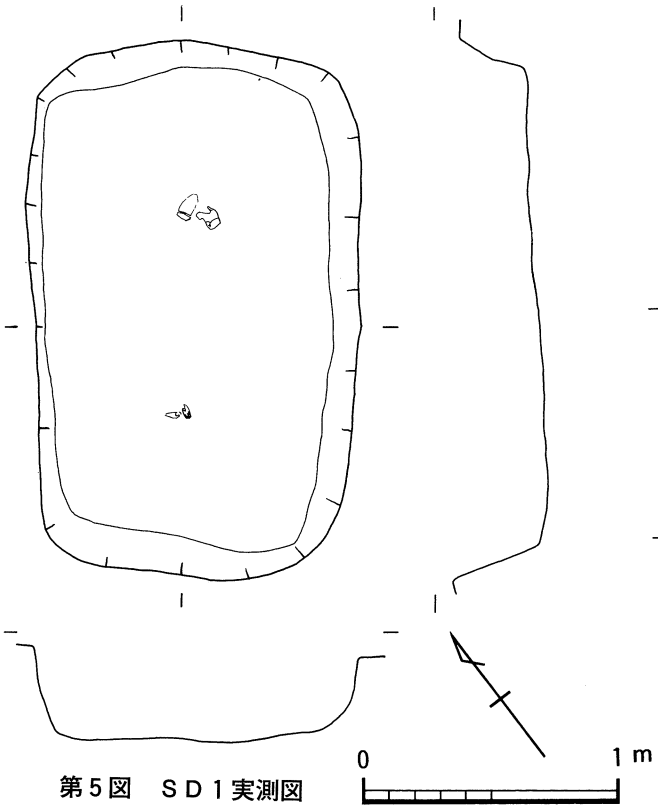
ＳＥ12

幅0.6m、深さ約30cm を測る。調査区南端に位置する。

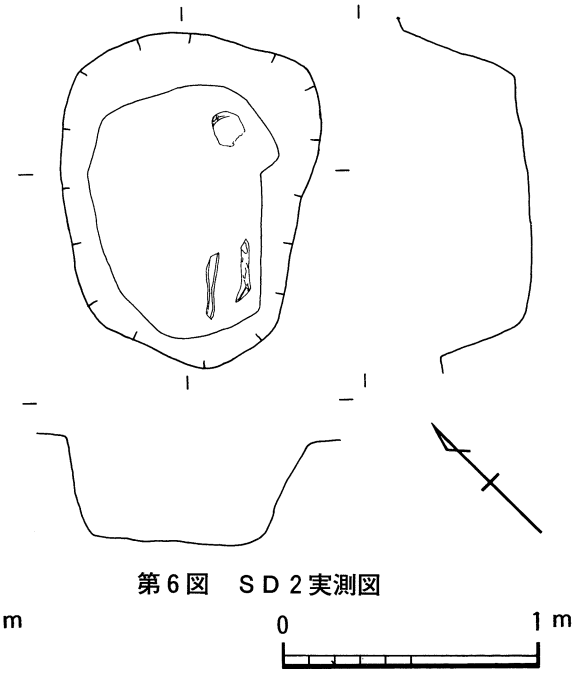
遺物はほとんど出土していない。



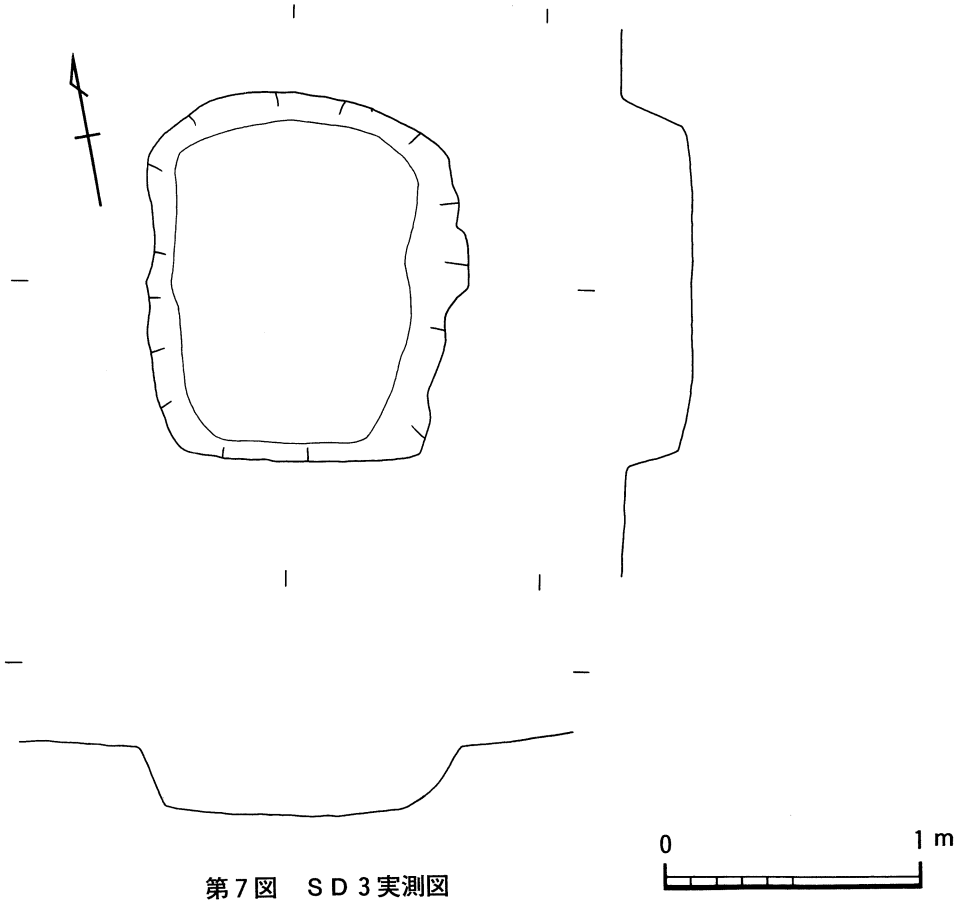
第４図　ＳＡ１遺構実測図



第５図　ＳＤ１実測図



第６図　ＳＤ２実測図



第７図　ＳＤ３実測図

3．遺物について

ＳＡ１の遺物（第８図）

１は磁器碗である。２～６は土師器である。２は甕で胴が長く伸びるタイプである。内外面ともナデ調整で内面の一部に指頭痕がみられる。３は台付鉢で内外面ともナデ調整である。外面の一部に黒変がみられる。４～６は高杯で４、５は脚の一部が残存する。内外面ともナデ調整である。６は坏部が残存している。口縁部に黒変がみられる。

ＳＢ２の遺物（第９図）

７～10、12、13は土師器である。７～９は碗で、７は底部外面と体部外面に黒変がみられる。８は輪積み痕が残る。10は壺で体部内面に指頭痕、外面には黒変がみられる。12、13は甕で12は体部外面に黒変がみられる。また、輪積み痕が残る。11、14、15は弥生土器である。11は二重口縁壺で内外面ともナデ調整である。14、15高坏で14は坏部が残存しており、内面の一部に黒変がみられる。16～22は鉄滓である。

ＳＥ１の遺物（第10、11図）

23～25、27～30は陶器の碗である。23は低い高台を有し、23・24とも内外面に緑釉がほどこされているが、高台内は無釉である。31～33は陶器の鉢である。33は見込に砂粒が付着している。34～38は磁器の碗である。35は高台の外面の一部は釉が剝がれている。39、40は磁器の猪口である。41～47は磁器の皿である。43は輪花皿で、見込に草木文が染付されている。44は高台をもたず、見込には44は某かの文字が、体部外面の２ヵ所に梵字が染付されている。48、49は土師器の高坏である。50は須恵器の鉢である。51は軽石製品である。

ＳＥ２の遺物（第12、13図）

52～60、68は陶器である。52は皿で、底部外面の中央部が突出している。体部外面の高台の付け根の部分に釉が垂れてきた痕がみられる。また、底部には砂粒が付着している。54は碗の口縁部である。内外面とも黒色を呈し、やや光沢がある。56は皿で、口縁部が波打っている。58は壺である。59、68は擂鉢である。60は甕で、内面に指頭痕、叩き痕がみられる。61～64は土師器である。61は甕、62、63は高坏、64は鉢である。65～67は須恵器の壺である。69は軽石製品である。軽石の中央部に穿孔が施されている。

ＳＥ４の遺物（第14、15図）

70は砥石、71は磨石である。72、73五輪塔で、72は空風輪、73は地輪である。

ＳＥ５の遺物（第16、17図）

74～79は陶器の擂鉢である。80は陶器の壺である。81、82は陶器の甕の口縁部である。81は輪積痕がみられ、82は口縁が「く」の字に外反する。83は須恵器の高台付碗、84は須恵器の壺である。85は須恵器の甕である。86は軽石製品である。製品の中央部に穿孔が施されている。

ＳＥ６の遺物（第18図）

87は須恵器の鉢である。口縁部の内面に自然釉がみられる。

ＳＥ７の遺物（第19、20図）

88～93は陶器の碗である。88は高台外面に釉が垂れた痕がみられる。また、高台内には貫入もみられる。89は天目茶碗である。内面及び外面は釉がかかっているが、底部に近い部分は無釉である。90は底部外面及び高台内は無釉である。91は体部内面に釉が垂れた痕がみられる。92は体部内面に貫入、体部外面に蓮弁文がみられる。93は碗の口縁部である。体部内外面とも緑色の釉がかり、貫入がみられる。94は土師質の焙烙である。95、96は陶器の甕である。95は口縁部である。輪積痕がみられる。96は底部である。胴部内面に指頭痕及び叩き痕がみられる。97、98は磁器の皿である。99～103は土錘で、103は両端穿孔土錘である。104は砥石である。

ＳＥ10の遺物（第21図）

105は陶器の皿である。体部内外面ともに貫入がみられ、光沢がある。106は土師器の高坏である。107は砥石である。

ＳＥ11の遺物（第22図）

108は土師器の甕である。口辺部の内面にススが付着している。

遺構外の遺物（第23図）

109～113は陶器の碗である。109・110は底部及び高台内は無釉で、底部外面に釉が垂れた痕がみられる。112は体部内面及び高台外面に蓮弁文が描かれている。

114は磁器皿で、見込は蛇の目剝ぎである。

115は磁器皿で、見込と体部内面に草木文が染付されている。畳付に砂粒が多量に付着している。

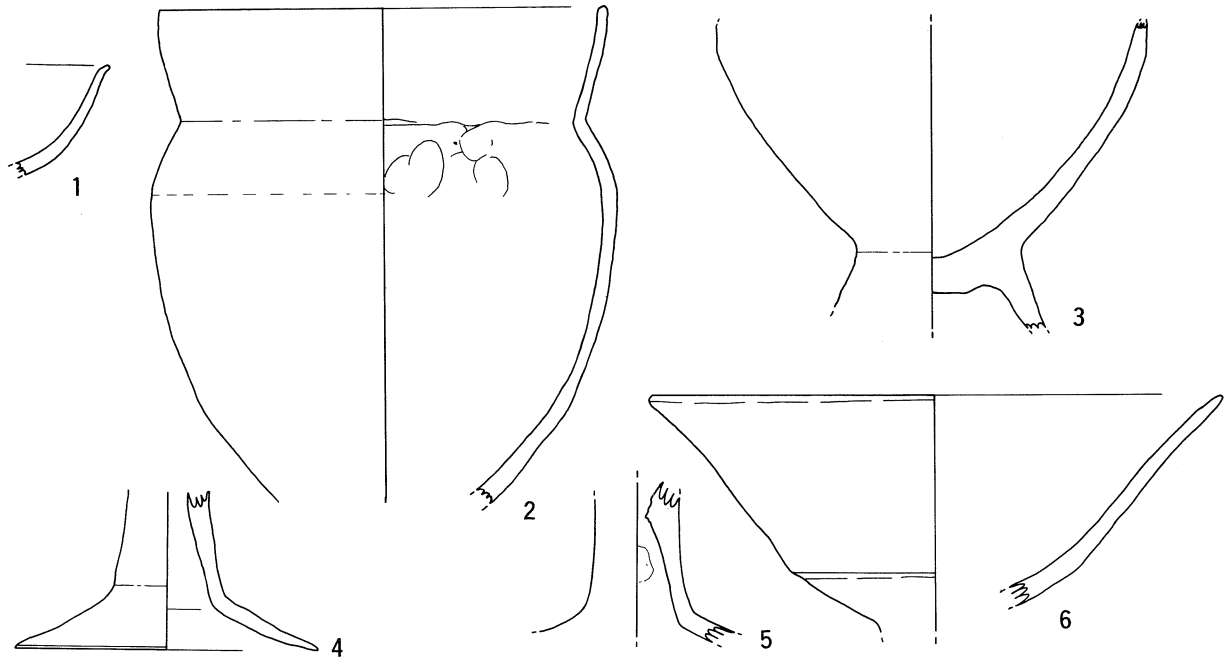
116は土師器の碗である。底部外面にヘラ削りが施され、底部内面はユビオサエの後、ヘラでナデた痕がみられる。

117は土師器の甕である。ＳＤ１の北側に埋甕炉として据えられていたもので、底部のみが残っていた。底部内面に指頭痕がみられる。

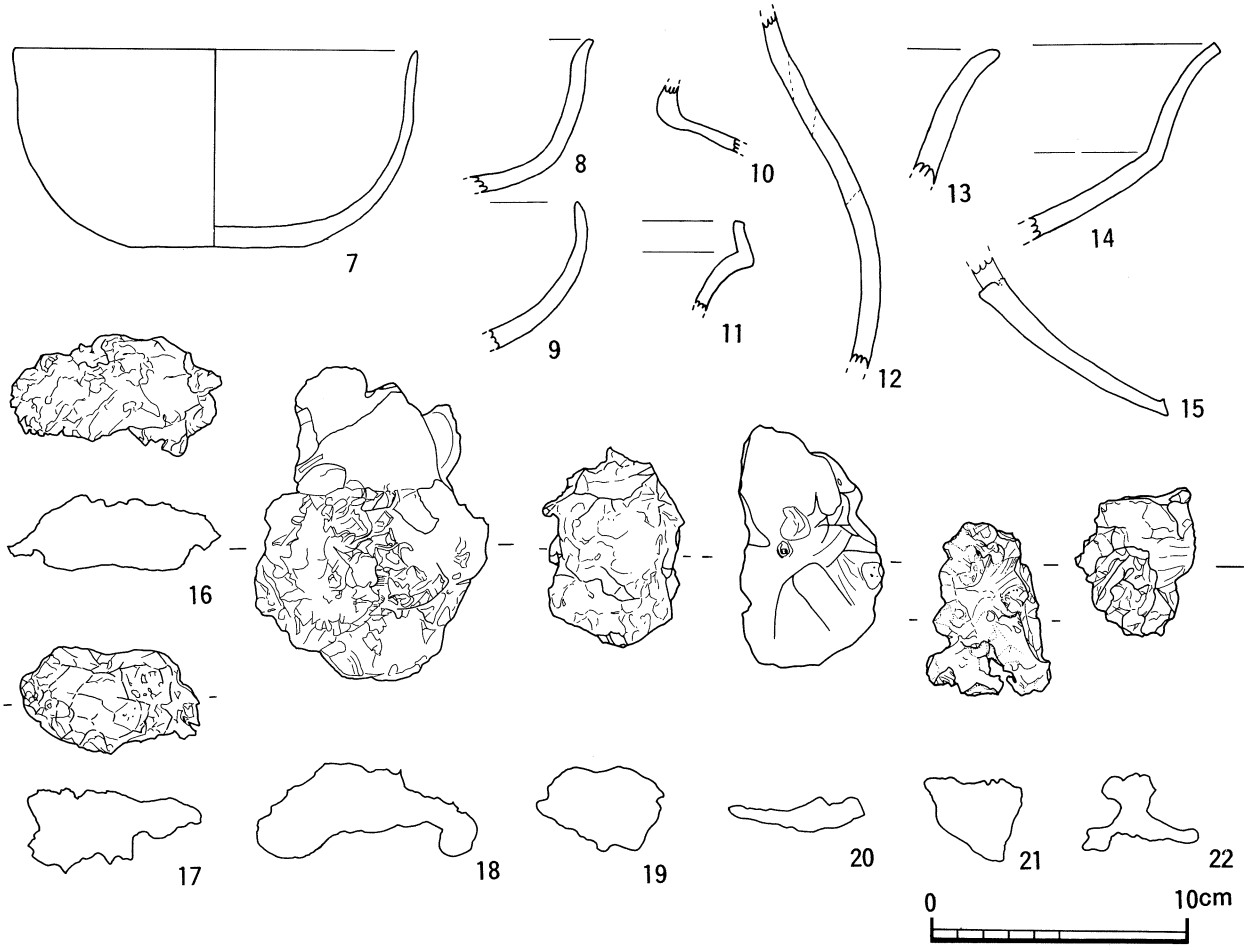
118は用途不明の軽石製品で、深さ５㎜の浅い溝がみられる。

119は軽石製品である。深さ1.5cm のくぼみを有するが、使用目的は不明である。

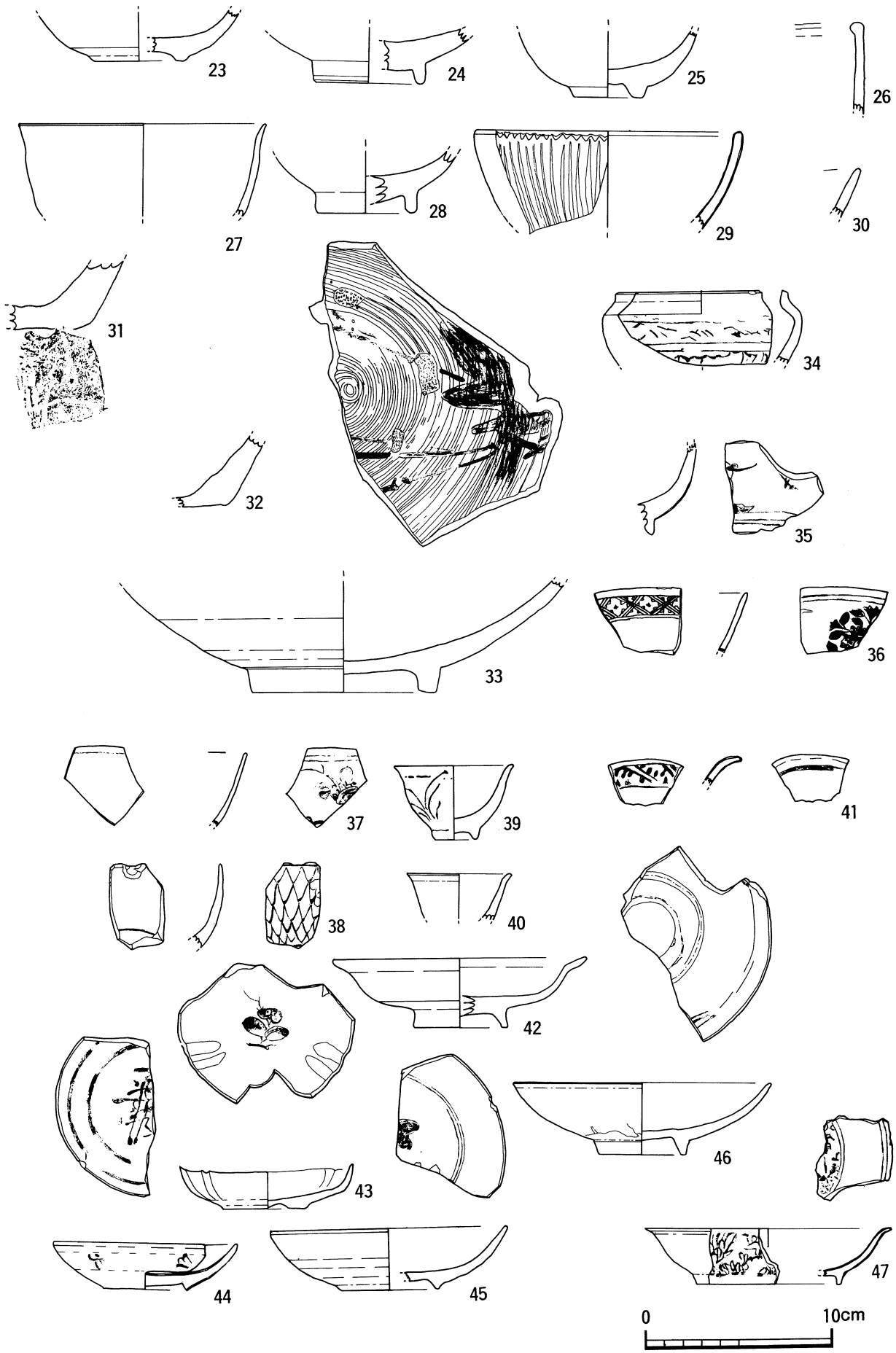
120は鏡である。直径約9.8㎝、紐高約４㎜、厚さ１㎜を測る。外区には櫛歯文が施され、内区には梅とみられる文様と雀とみられる鳥が２羽描かれている。



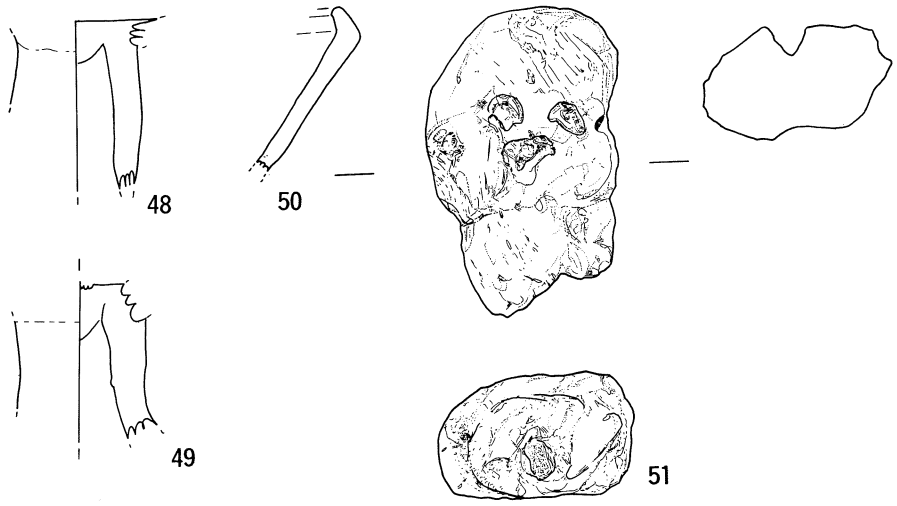
第８図　ＳＡ１出土遺物実測図



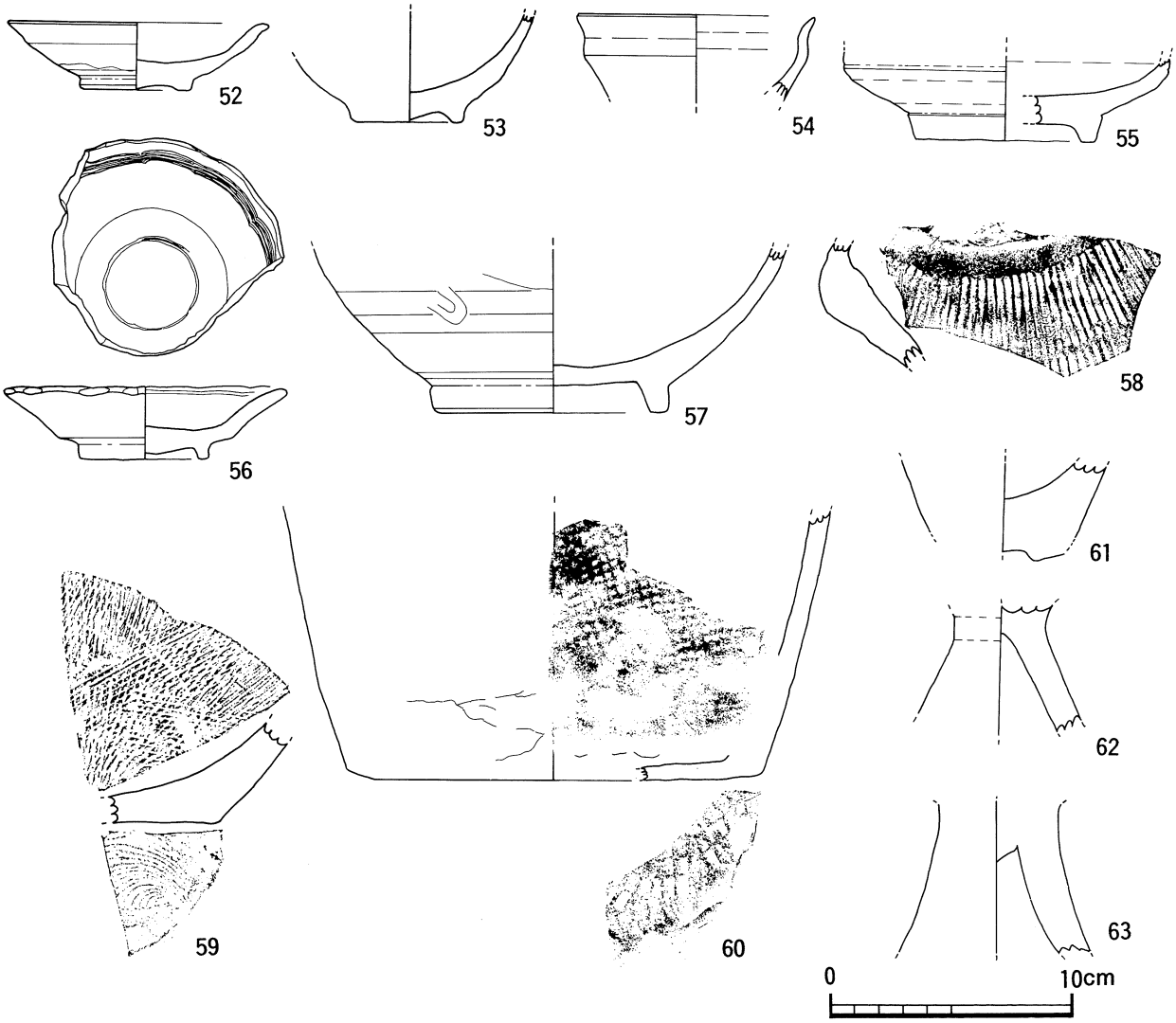
第９図　ＳＢ２出土遺物実測図



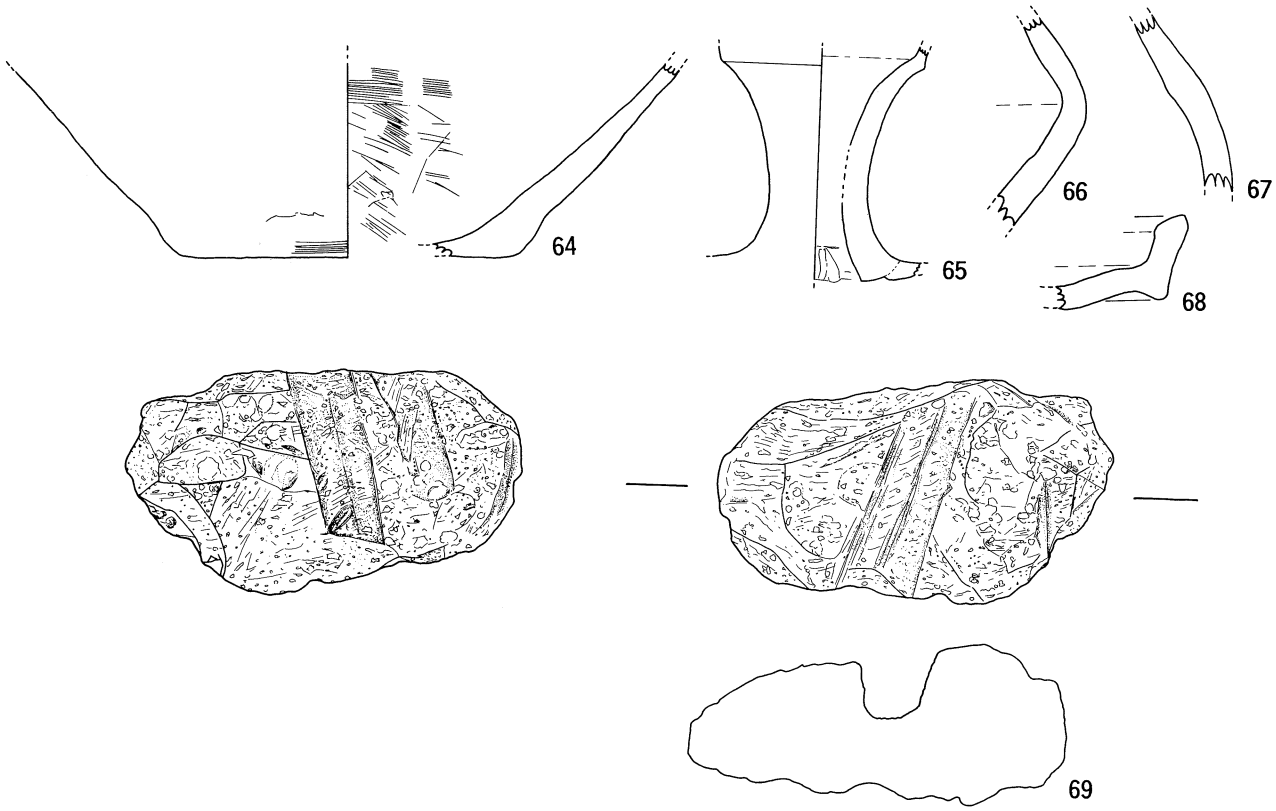
第10図　ＳＥ１出土遺物実測図　(1)



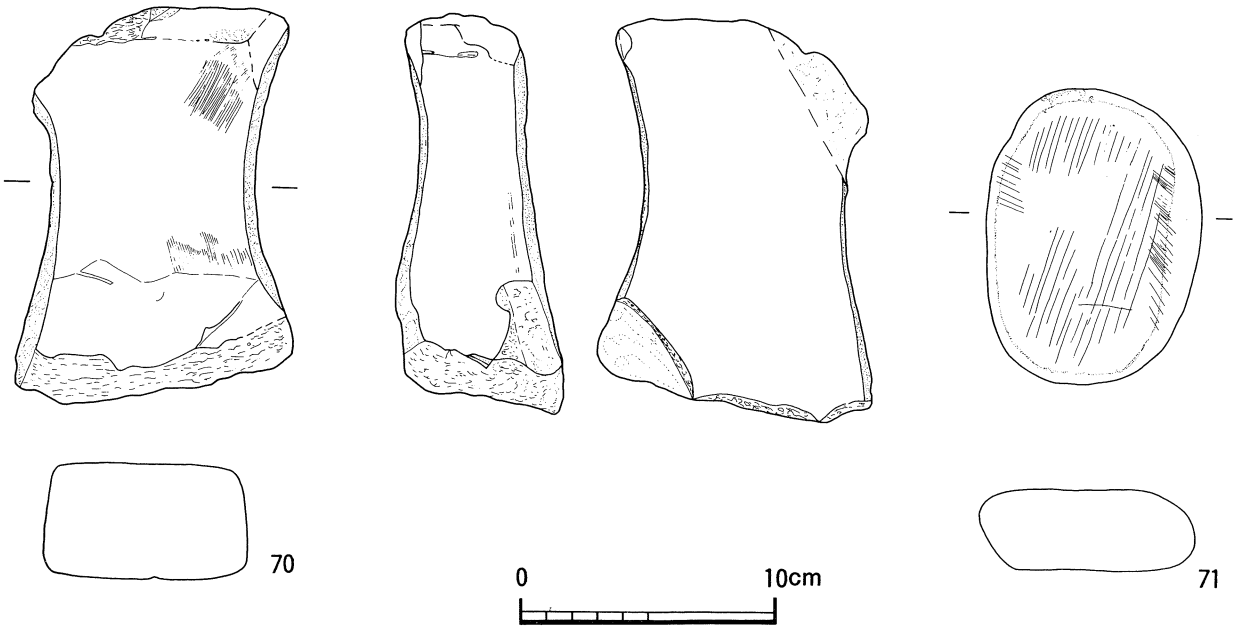
第11図　ＳＥ１出土遺物実測図　(2)



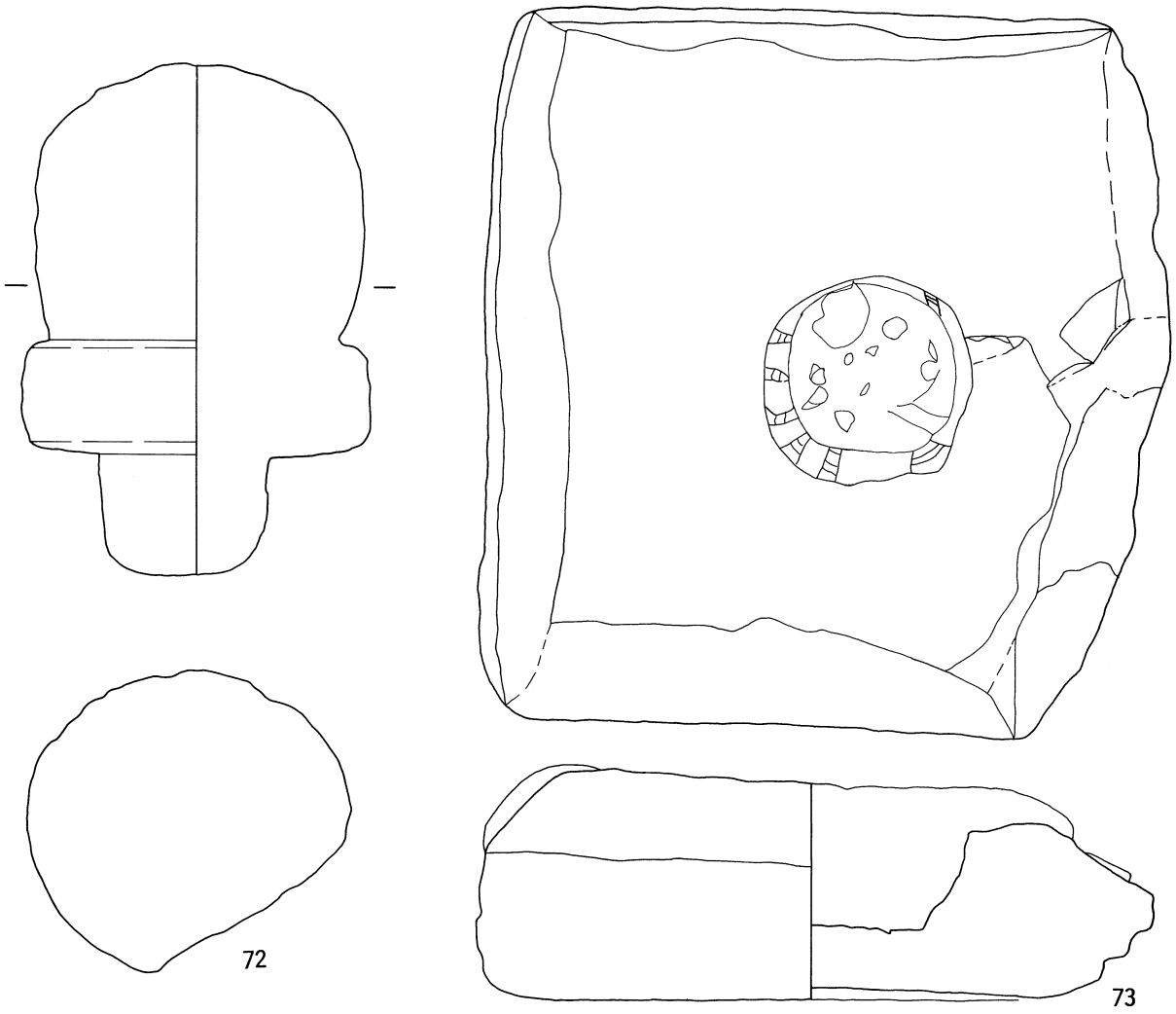
第12図　ＳＥ２出土遺物実測図　(1)



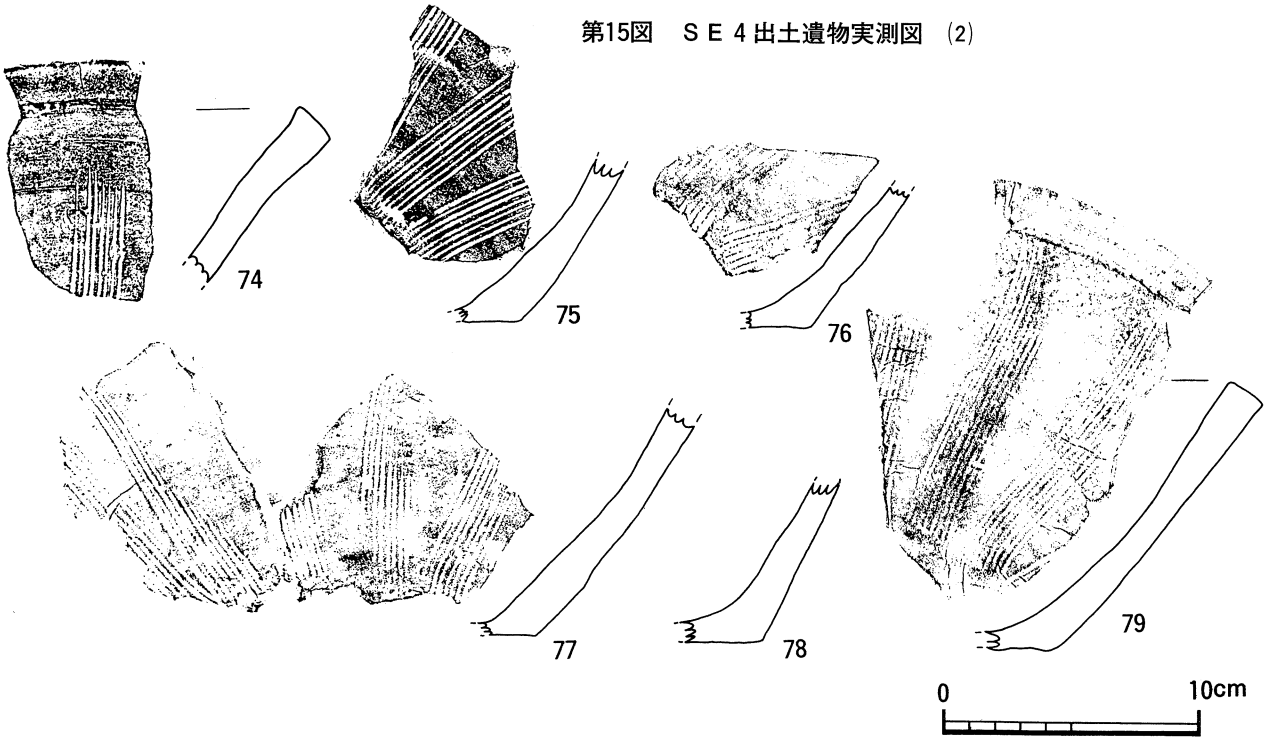
第13図　ＳＥ２出土遺物実測図　(2)



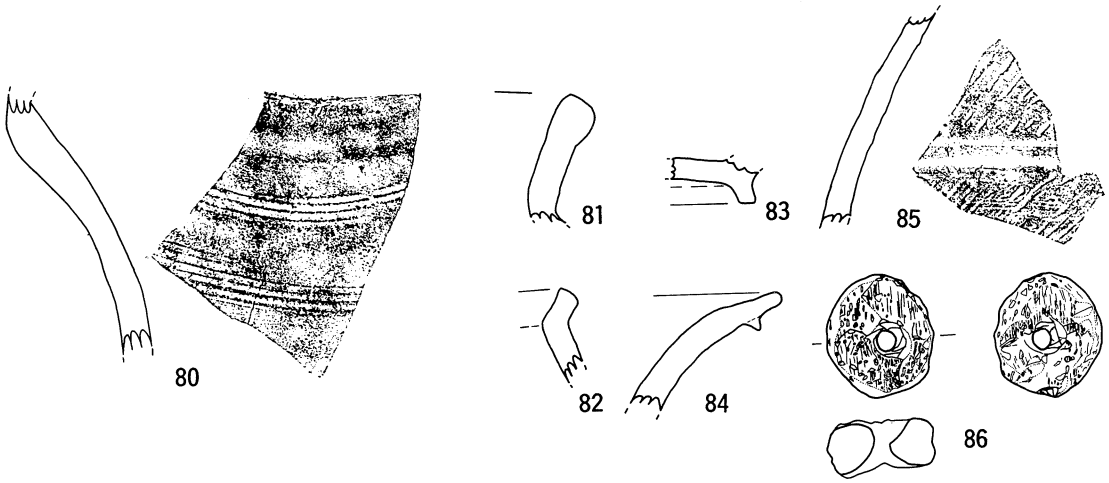
第14図　ＳＥ４出土遺物実測図　(1)



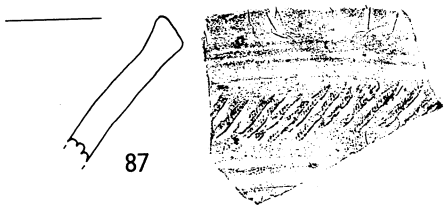
第15図　ＳＥ４出土遺物実測図　(2)



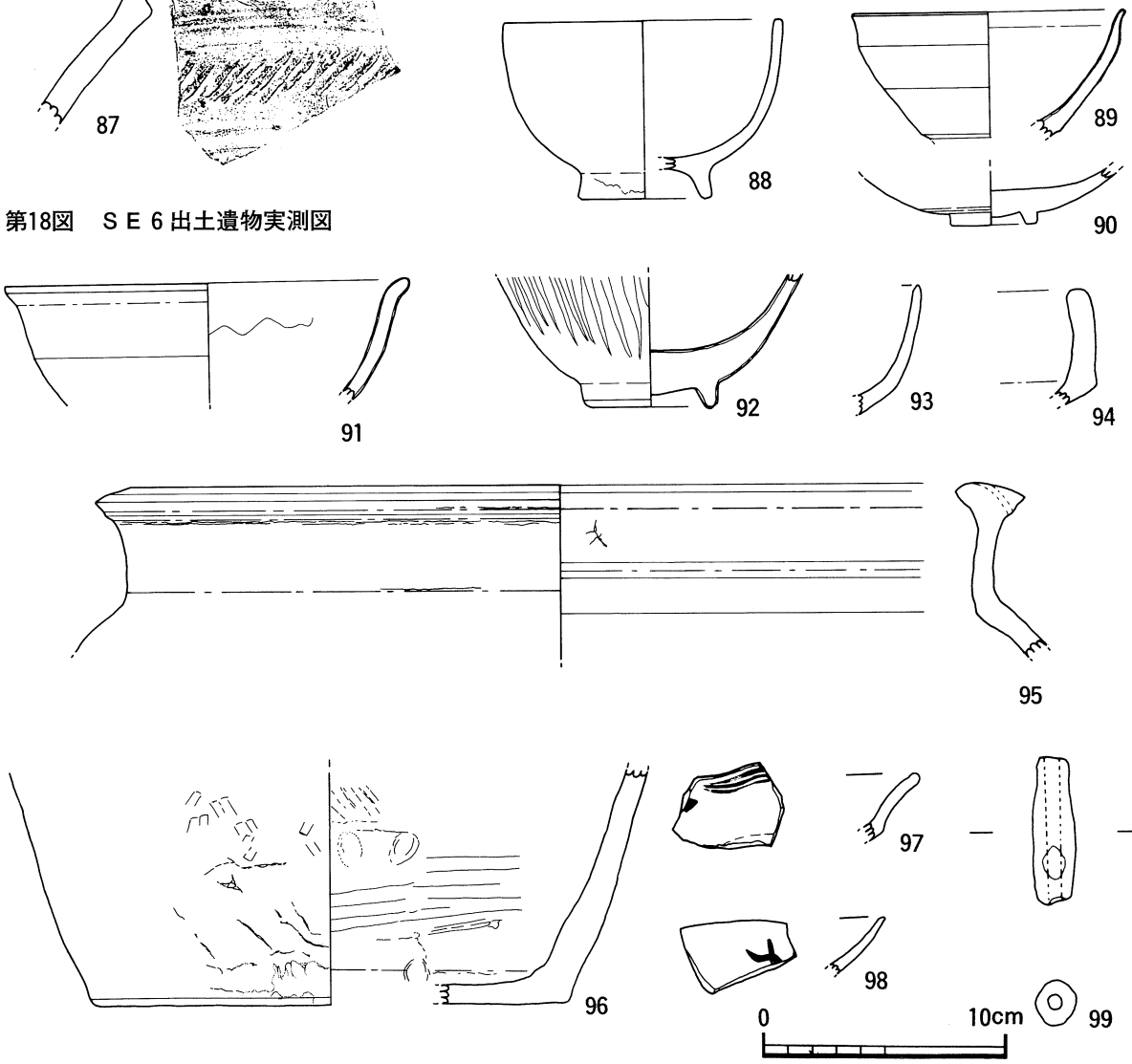
第16図　ＳＥ５出土遺物実測図　(1)



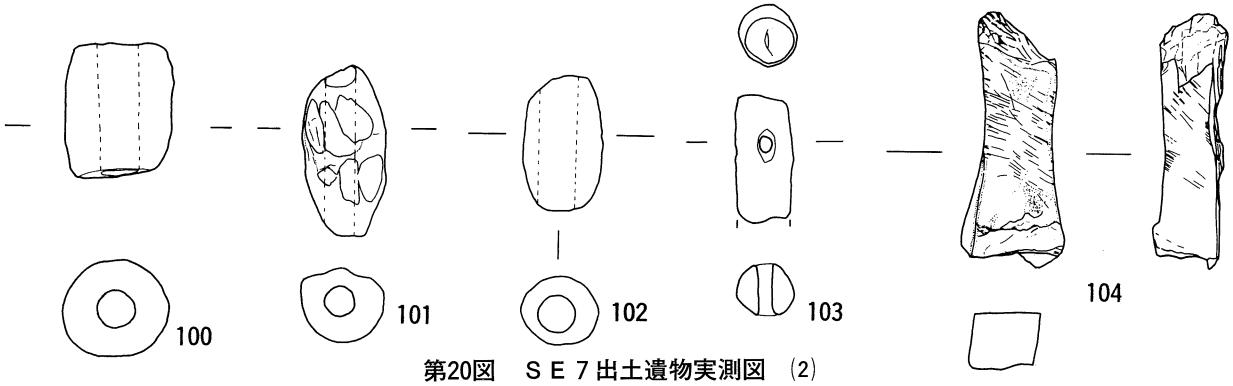
第17図　ＳＥ５出土遺物実測図　(2)



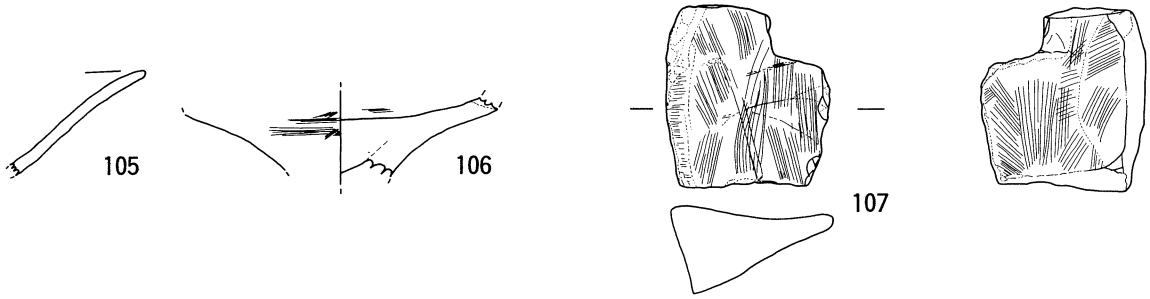
第18図　ＳＥ６出土遺物実測図



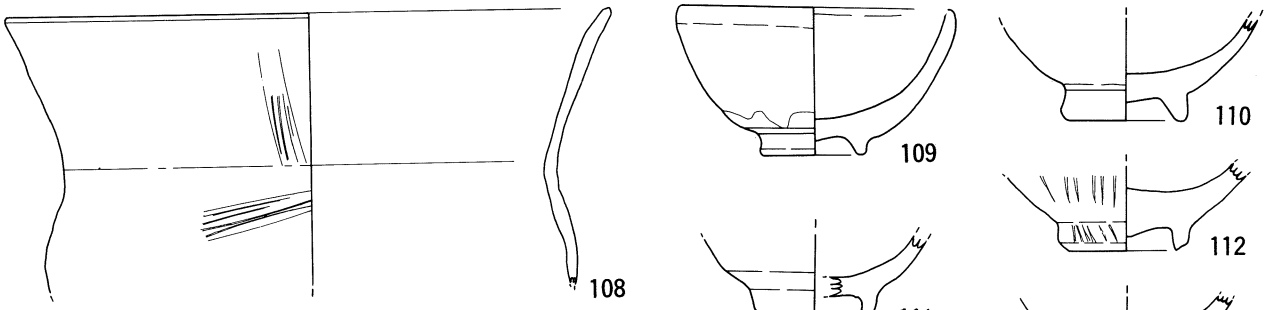
第19図　ＳＥ７出土遺物実測図　(1)



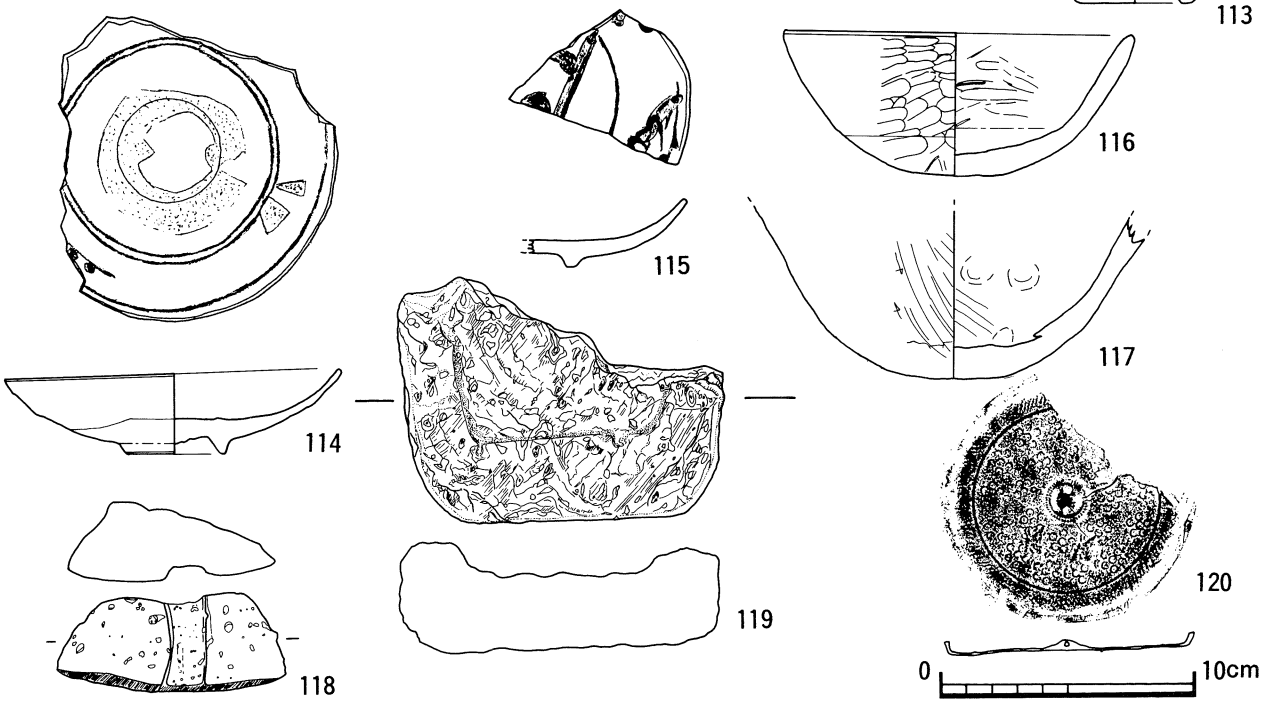
第20図　ＳＥ７出土遺物実測図　(2)



第21図　ＳＥ10出土遺物実測図



第22図　ＳＥ11出土遺物実測図



第23図　遺構外出土遺物実測図

Ⅲ．まとめ

今回の調査では、竪穴住居が１軒、竪穴状遺構が２基、土壙墓が３基、土坑が２基、溝状遺構が12条検出され、弥生土器や土師器、陶器、磁器等多くの遺物が出土した。ここで、遺構の性格や年代等についてまとめてみたい。

溝状遺構のうち、ＳＥ２は、調査区北側の溝の幅が約２ｍと他の溝と比べて格段に広く、幅広い時代の土器が出土している。また、調査区北東部分では掘り換えた形跡がみとめられたことから、長期にわたって使用されていたと考えられ、調査地の北側を流れる新別府川に向かって、傾斜していることから、この溝が水路としての役割があったと考えられる。また、ＳＥ２に伴って方形の張り出し部や円形、楕円形の掘り込みがみとめられた。これらは、周辺に居住していた人々の洗い場あるいは水汲み場等生活していく上で重要な役割を果たしていたと考えられる。

この他、注目すべきものとして、ＳＢ２の床面からかなりの量の鉄滓が出土していることが挙げられる。このことから、ＳＢ２で鉄に関する生産活動が行われていたと考えられる。

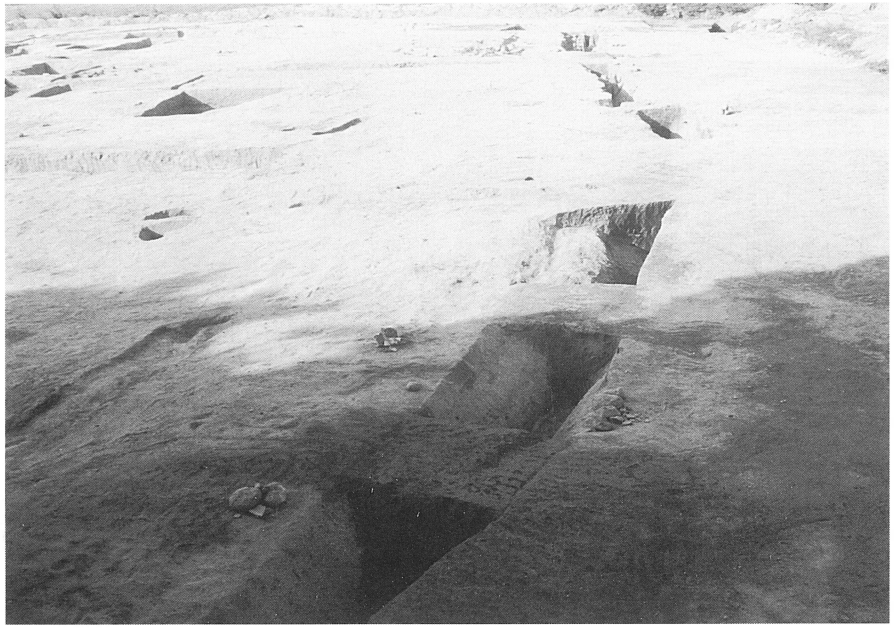
遺構の年代は、ＳＡ１が古墳時代前期末～中期初頭に、ＳＢ２が古墳時代後期、ＳＤ１～３は近世に、その他、溝状遺構はＳＥ１、２、４、７、10が近世に、ＳＥ５、６は中世に比定することができる。

以上、遺構の性格や年代等について述べてきたが、当遺跡から出土した陶磁器の搬入経路、当地を含めた周辺地域の鉄生産の全容等については周辺遺跡の発掘調査が進んでくることで、次第に解明されてくるであろう。

最後になりましたが、発掘調査に当たり、ご協力いただいた関係機関の方々、残暑続くなか作業していただいた作業員の皆様に感謝いたします。

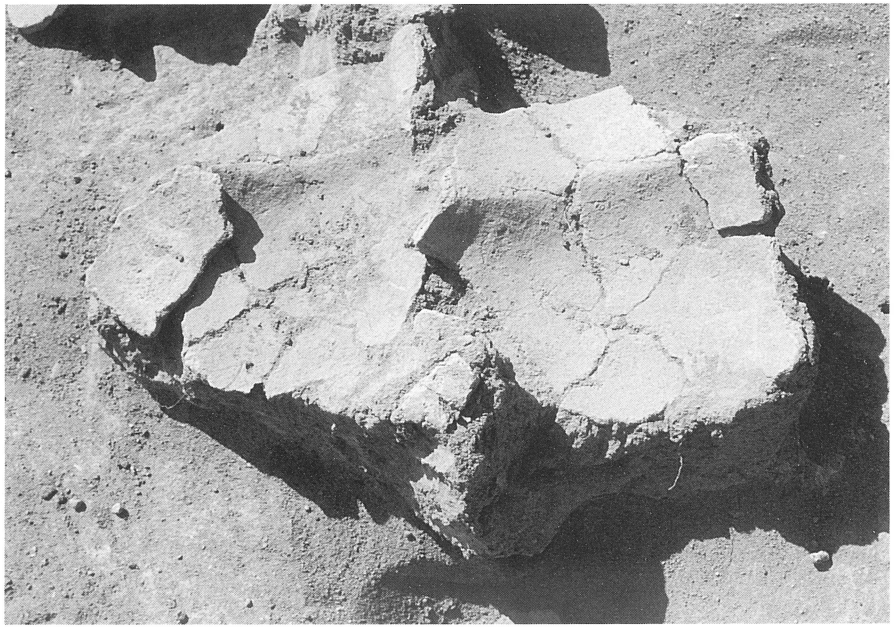
【参考文献】

長崎県教育委員会・松浦市教育委員会『桜楷田遺跡』
「長崎県文化財調査報告書第76集」1985
久留米市教育委員会『久留米城下町　両替町遺跡』
「久留米市文化財調査報告書第116集」1996
加賀市教育委員会『八間道遺跡－公立加賀中央病院改築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査－』
「加賀市埋蔵文化財発掘調査報告書第30号」1996
財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター『槙ケ原製鉄遺跡発掘調査報告書』
「広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第149集」1997
宮崎県編『宮崎県史　通史編　原始・古代１』1997



図版１　北中遺跡全景図

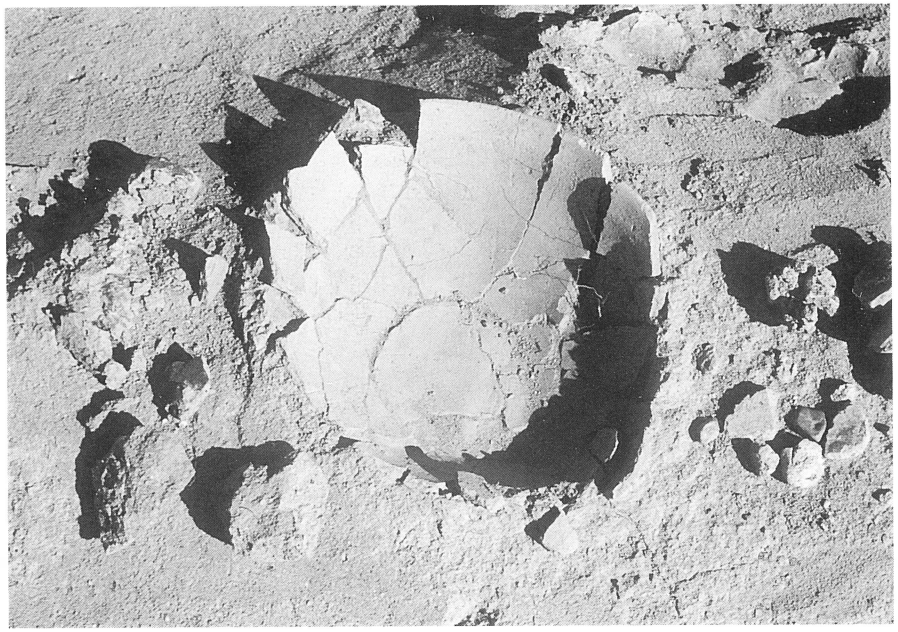
図版２　ＳＡ１出土状況（全景）



図版３　ＳＡ１出土状況

図版４　ＳＡ１完掘状況

図版５　ＳＢ２出土状況（全景）

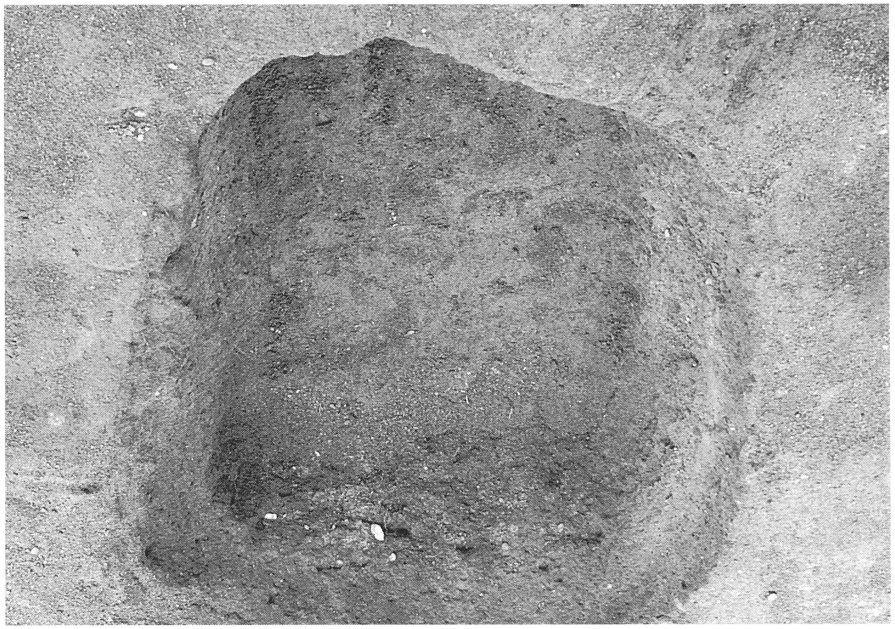


図版６　ＳＢ２出土状況

図版７　ＳＤ１出土状況

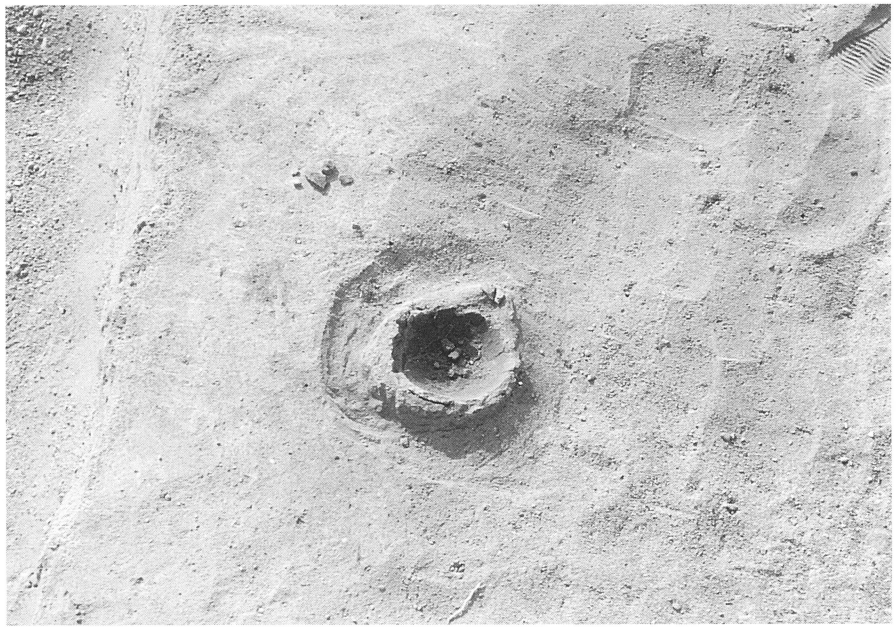
図版８　ＳＤ１完掘状況

図版９　ＳＤ２出土状況



図版10　ＳＤ２完掘状況

図版11　ＳＤ３完掘状況



図版12　埋甕出土状況